

大分大学医学部附属地域医療学センター 季刊誌

2012.2

3号

平成24年2月29日 第1版発行  
発行者  
由布市医大ケ丘1の1  
大分大学医学部附属地域医療学センター  
TEL : 097-586-6306  
mail : chi-ryou@oita-u.ac.jp  
HP : http://www.med.oita-u.ac.jp/chi-ryou/

# ふれあひ

## プライマリ・ケア道場について

写真は地域医療学センターが定期的に行っている「プライマリ・ケア道場」の風景です。本年1月で、第4回目の開催となりました。回を重ねるごとに出席希望者が増えており、当初は学生および研修医対象であったのですが、最近では中堅の勤務医の先生の出席も増えてきております。道場では毎回、その道の

プロフェッショナルとして臨床で活躍されている先生を講師としてお迎えし、実際の臨床に即した内容でわかりやすく御講義していただくため出席者の評価も上々です。また、「地域の病院を知ろう」という目的で、毎回県内の医療機関の先生方に依頼し、病院紹介をしていただいております。(次ページへ続く)





これまでのプライマリ・ケア道場の内容

紹介医療機関

- 健康保険南海病院
- 豊後大野市民病院
- 津久見医師会立津久見中央病院
- 臼杵市医師会立「スモス病院」

講演内容

第1回 「腎臓病を見出し、適切に対処しよう」

聖マリアンナ医科大学 安田隆生先生  
第2回 「ERを受診する腹痛患者の初療のポイントとピットフォール」

熊本赤十字病院 井清司先生  
第3回 「不明熱・プライマリケアで知っておくべき膠原病鑑別疾患」

聖路加国際病院 岸本暢将先生  
第4回 「嚥下障害をきたす病態と疾患の考え方」

北里大学 片田夏也先生  
このように、テーマは実際の診療でよく遭遇する症候・疾患を取り上げており、学生のみならず、日頃一般臨床に携わっておられる先生方にも満足できる内容であると自負しております。

次回のプライマリ・ケア道場は6月1日を予定しています。今後もしろいろな希望を最大限に受け入れ、講義内容を決めていきたいと考えておりますので、もし「こんな内容の話が聞きたい」「この先生の講義が聞きたい」などの御希望がありましたら地域医療学センターまでお知らせください。また、自分の働く病院を知ってほしいという先生方からの、病院紹介への立候補もお待ちしております。お気軽に地域医療学センターまで御報ください。

来年度の地域医療実習について

今年度より始まった医学科6年生対象の地域医療実習が来年度も行われます。

去る昨年12月に、実習を受け入れていただいた施設の先生方などをお招きし、反省点や改善点を話し合う「地域医療教育のあり方を考えるシンポジウム」を大分県労働福祉会館ソレイユで開催いたしました。このセミナーでは、各病院での実習内容や特色を紹介していただきました。離島やへき地医

療を体験させたり、地域での住民の皆さん方との懇話会や行政の方々との話し合いなど、各地域の特色を生かした様々な教育方法を聞かせていただき、地域医療学センターとしても大変参考になりました。また、地域での包括的医療というものを学生に学ばせてほしい、という地域医療学センターの希望から、すべての施設で介護・福祉・保健活動の教育を取り入れていただきました。セミナーの際にもまとめとお話しさせていただきましたが、学生の意識がもつとも変容したところが、この介護・福祉分野でした。



全体的な私の感想としても強く感じたことは、「学生は思いのほか大分県のことを知らない」ということでした。大分県出身の学生でも、特に大分市や別府市など比較的中心部の出身の学生が多いため、大分県の地理的なことすら把握できていないことに少し驚きました。しかし今回の実習で、実際に自分で足を運んで、2週間の間その土地で生活することで、少しは学生たちの地域に対する「垣根」のようなものが取り払われたのではないかと感じています。実際学生たちが持つ、地域医療に対するそこはかとない不安というのは、主に情報不足によるもののようなのです。インターネットなどの通信網が発達した現代においては、どうしても学生たちの意識も画的になりがちであり、その結果大都市部の病院に研修医が集中してしまう原因の一つになっているものと考えます。しかしながら今回の実習で、地域の病院でも、ある程度の病床があるような基幹病院においては決して最新の技術に遅れをとっているわけではないことに学生が気づいてくれました。また、大都市部では経験することの少ない医療（福祉・介護の面も含めて）への印象もぐっとよくなったようです。今後各病院のさらなる研修体制の強化によって、大分県内に若手医師が残る割合はさらに上昇するでしょう。

話を戻します。来年度は、今年度御協力していただいた施設に加え、新たに国東市民病院、天心堂へつぎ病院、高田中央病院、杵築市立山香病院、

地域の病院紹介

今回は大分市の佐賀関病院の紹介です。理事長の長松宜哉先生と、地域連携課を代表して、高橋勝課長に御寄稿いただきました。

「佐賀関シーサイドホスピタル」

佐賀関病院 理事長 長松 宜哉

「関アジ」「関サバ」佐賀関精錬所の東洋の大煙突等で有名な大分市佐賀関に病院があります。大分市の中心部から車で40〜50分の距離ですが、すでに高齢化が進行し、遠距離の通院ができなくなった住民にとっては、かけがえのない病院となっています。

平成16年に大分市と旧佐賀関町の合併に合わせて完全民営化された病院です。平成17年12月に現在地に新築移転しました。フェリー乗り場の隣にあり、病棟の窓からは港が一望され、まるで海に浮いているような感覚になるシーサイドホスピタルであります。（津波には無力ですが）

特徴は地区内に3つのサテライト診療所を同時に運営し、訪問介護、通所介護を有する介護施設「ひまわり」も運営しているため、この地区で病院を中心にした「地域包括ケアシステム」を構築していることです。90床という小規模病院ですが、365日夜間、休日救急当番医であることで住民に安心と安全を保証するとともに、訪問診療から、急性期入院治療、回復期リハビリから訪問リハビリまで幅広くスムーズな連携システムを作り上げています。大分市内の高度医療機関とも密に連携し、特に住民の社会復帰に力を注いでいます。



内科が主体となりますが40歳前後の医師が多く、プライマリケアの経験も豊富で幅広い医療ニーズにこたえています。総合医の基礎を持った専門医もチームワークよく働いています。女性医師も多く、若い医師にとっても地域医療に興味のある医師にはやりがいのある病院と想います。